疑問

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
疑問

【Ｎコード】
Ｎ６０４４Ｉ

【作者名】
山羊ノ宮

【あらすじ】
「その本、僕も好きなのですよ」
私が司書さんに本を渡していると、後ろから声をかけられた。
その男は眼鏡を直し、二コリと微笑んだ。
顔馴染みではある。

「その本、僕も好きなのですよ」
私が司書さんに本を渡していると、後ろから声をかけられた。
その男は眼鏡を直し、二コリと微笑んだ。
顔馴染みではある。
けれどもそれだけで話したことなど無かった。
「そうですか。そうですね。いい本ですね、この本」
彼も私もその図書館の常連ではあるので、無視すると言うのも今後もここに通う意志のある私にはまずかった。
世間話程度になら常連同士の会話と言うのも楽しいかもしれない。
「何だか面白可笑しく書かれてあるのに、その中に悲哀があって、読んでいて胸が苦しくなってしまうそんな本です」
本について語る私を彼は驚いたように見つめた。
まるで想像できないと言った風に。
確かに私は文学少女と言うのには程遠い風体かもしれないが、その反応は少々失礼ではないかと私は思う。
「そうなのですか。僕は単純に楽しみましたけど。きっと貴方は何か悲しいことやつらいことがあったのですね」
「はい？」
何を言っているのだと思った。
そして、自然とその気持ちが口に出てしまうのは私の悪い癖だ。
「悲しい事があると悲しみに敏感になってしまうから」
紡がれた彼の言葉に私はドキリとした。
何かを言い当てられたような、そんな感覚だった。
けれどもすぐに思い直す。
人生生きていればつらいこと悲しいことなどあって当たり前である。
それをさも占い師のように語る彼に少し腹が立った。
「だったら貴方は楽しい事があったということですか？」

言葉にとげがあった。
「ええ。こうやってあなたとお話しできましたから。楽しいですよ、僕は」
「な?!馬鹿じゃない・・・」
少なくとも初めて話す相手に馬鹿はないだろうと思うが、口は動いてしまった。
しかし、彼は私の罵倒に動じた様子はなかった。
「そうですね。恋は人を愚かにしてしまうものですから」
そして、彼は眼鏡の奥の瞳を細め、穏やかな笑顔と共に自信ありげにじっと私を見つめる。
その視線に頬を紅潮されている私に自分で突っ込んでやりたかったが、頭の中は真っ白で何も言葉が浮かばなかった。
一体どうしてしまったのだ、私は?

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6044i/

疑問

2010年12月18日19時10分発行